ZOSHIGAYA MISSIONARY HOUSE MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第 64 号　　2019 年 12 月 1 日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5　TEL/FAX　03−3985−4081

スプリングコンサートを開催しました

▲演奏中の様子

▲北村さんのトーク中の様子

5 月 12 日に行われたスプリングコンサートでは、蓮見佳奈さん（ヴァイオリン）、北村聡さん（バンドネオン）、小林萌里さん（ピアノ）をお迎えし、演奏していただきました。長く続く当館のコンサートは、所蔵のウェスターンピアノ（およそ 80 年前に製作された国産ピアノ）を中心に編成し、クラシック音楽を演奏していただくのが主でしたが、今回は趣きを変え、タンゴの楽曲を演奏していただきました。ヴァイオリンやピアノは親しみ深い楽器ですが、バンドネオンは特に近年になって人気・知名度ともに高まりつつある楽器です。曲間のトークではバンドネオンの特徴を北村さんが実演しながら解説してくださいました。

タンゴはクラシックなどと比べると一曲の長さは短いそうで、今回は全 13 曲にアンコール曲と非常に多くの楽曲が演奏され、来場された観客の皆さんはバンドネオン、ヴァイオリン、ピアノの華やかなハーモニーに耳を傾けていました。

▲左より、ピアノの小林さん、バンドネオンの北村さん、ヴァイオリンの蓮見さん

宣教師・マッケーレブの幼少期

昨年の夏に寄贈を受けた新規収蔵資料の展示が始まりましたが（展示の紹介は 4 ページをご覧ください）、このページでは展示に合わせて、マッケーレブの幼少期をご紹介したいと思います。

資料の寄贈者である野村基之氏は、1980 年代に現地調査のためにアメリカへ赴くなど、精力的な活動をされていました。その際の調査や、マッケーレブの著作の内容をまとめ、『キリストの教会全国誌　福音』に「先駆者紹介」として寄稿し、1991 年から 1996 年までの全 45 編に渡って、知られざるアメリカにおけるマッケーレブの姿を紹介し続けました。

今回は、野村氏が調査結果をまとめた『福音』や、昭和 3（1928）年にマッケーレブと同宗派である「キリストの教会（Church of Christ）」の日本人によって発行された機関誌『道しるべ』を参考に、マッケーレブの幼少期の姿を追います。

▲12 歳ごろのマッケーレブ。
初めておさがりではない服を着て、
写真屋に撮ってもらいました。

マッケーレブは、1861 年 9 月 25 日にアメリカのテネシー州ヒックマン郡ダック・リバー村の近くのシェイディー・グローブ（Shady Grove）という地域で生まれました。ヒックマン郡の郡庁所在地であるセンター・ヴィルから離れた場所にあり、野村氏が実際に足を運んだところ、シェイディー・グローブ（直訳すると日陰の森）の名前の通りに森の深い田舎であった、とのことです [1]。

マッケーレブの生まれた年はまだ南北戦争がはじまったころで、父親は良心的兵役拒否者として戦争には出兵しなかったものの、ある日、銃を持った人に間違えて撃たれて死亡します。マッケーレブは生後6か月で父を亡くし、母親と 6 人の兄弟とで暮らしていくことになります。

父親の死後、敬虔なクリスチャンであった母親は、まだ幼いマッケーレブに聖書の内容を教え始めます。マッケーレブの子ども時代の思い出が、『道しるべ』第 18 号に掲載されているので、引用します。

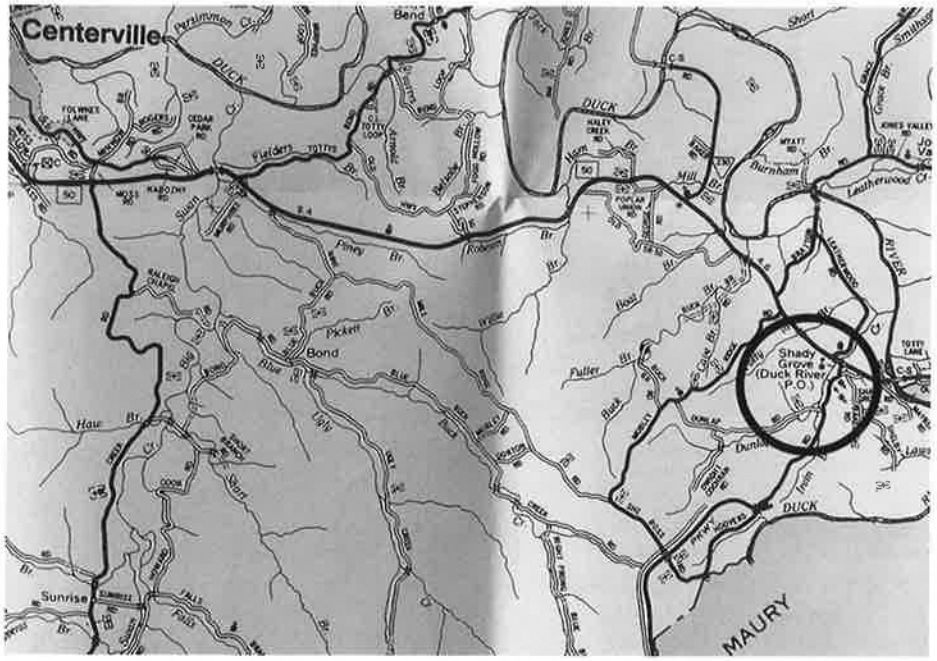
> 私は四歳まで母に教へられました。そのため四歳になったときは子供のやさしい本くらひは讀(よ)むことができました。
> よく母は私達のために冬の着物を作りながらそのそばで聖書を読むことを教へました。ですから私等は早くから神を信じ子供の盡(つく)すべき孝行をも教へられました。実に私は ABC を新約聖書の中によって教へられたのでした。[2]

ABC の読み書きを新約聖書から学んだというマッケーレブは、6 歳頃から兄達と一緒にフォーティー・シケット（Forty Thicket）という小さなフリー・スクールに通い始めます。しかし、マッケーレブは家の手伝いがあったため、農繁期は一時的に通学せず、農閑期になると通学を再開する、といったことを何度も繰り返したことで、最終的に 21 歳頃までフリー・スクールに通うことになりました。

さて、このような教育を受けていたマッケーレブですが、14 歳でバプテスマ（浸礼。体を水に浸す行為で、入信儀式のこと）を受けます。敬虔なクリスチャンであった母親の影響が大きかったようで、例えば兄弟げんかで相手を罵ってしまったときには「なぜこのような悪い言葉が口から出るのだろう」と驚いて反省したり、一人で教会に行く決心が出来ずに礼拝に参加しなかった際にも自分を責めたりしています。このように厳格な性格に育ったマッケーレブは、自らの 3 つの罪を告白してクリスチャンになります [3]。この時の地元の教会（母教会）が「キリストの教会（Church of Christ）」なのだそうです。ヒックマン郡での「キリストの教会」の信仰の広がりの様子を野村氏が『福音』に報告しているので、下記に引用します。

> ヒックマン郡の周辺はキリストの教会しかない…と断言しても良い程にキリストの教会の多い地域です。人口が少なくて広大な面積を有する過疎地なのに、どうしてそんなにキリストの教会が沢山あるのだろう…と考えざるをえない程にキリストの教会で一杯です。
> センター・ヴィルからコロンビアに向かう田舎道の中間点あたりにダック・リヴァーと言う小さな村があります。人口は私が車窓からざっと見ての勝手な想像ですが、現在二〇名もいれば上等ではないのでしょうか。[4]。

その後、27 歳でカレッジ・オブ・ザ・バイブル（神学について学べる学校）へ入学し、30 歳になる 1891 年の 6 月に卒業、最初の妻であるデラと結婚するとともに、日本への布教活動を考え始めることになります。こうしてみると、いかに苦労してマッケーレブが幼少期を過ごしたか、そして母親のキリスト教教育の大きさが伝わってきます。



▲野村基之氏から寄贈された、ヒックマン郡の地図（画像はその一部）。丸で囲まれた地域がシェイディー・グローブ。ヒックマン郡の郡庁所在地であるセンター・ヴィルから離れ、隣のモーリー郡の近くにあります。

脚注：

[1]『キリストの教会全国誌　福音』7 月号、福音誌発行委員会、1991 年。
[2]『道しるべ』第 18 号、道しるべ社、1929 年。
[3]『キリストの教会全国誌　福音』9 月号、福音誌発行委員会、1992 年。
[4]『キリストの教会全国誌　福音』7 月号、福音誌発行委員会、1991 年。

新規収蔵資料の展示をはじめました

雑司が谷旧宣教師館は、1989 年の開館以前より、マッケーレブと同宗派の方々をはじめ、マッケーレブと関わりのあった方のご厚意で資料の寄贈を受けてきました。ここ数年は資料の寄贈を受ける機会はほとんどありませんでしたが、2018 年の夏、マッケーレブと同宗派の野村基之氏より、マッケーレブ関係の資料を多数、ご寄贈いただきました。小石川の写真屋で現像されたマッケーレブと賄方（まかないがた）（お手伝いさん）の家族との写真や、日本ではほとんど見る機会のないマッケーレブの著作の写し、アメリカで取得した書籍や物品、晩年に名誉教授として教鞭をとったペパダイン大学の創立 60 周年パンフレット、戦前・戦後を問わず宣教師に関連する書類など、その種類も多岐に渡ります。

今回、新規に寄贈を受けた資料は、大別して、①マッケーレブが日本にいた時の資料②マッケーレブがアメリカにいた時の資料③寄贈者が旧宣教師館の開館のために取り扱った資料の三種類に分けられます。そのうち、②マッケーレブがアメリカにいた時の資料は更に、子供時代と 1941 年の帰国後に分けられます。今回は子供時代の資料を展示しました。

今回の展示では、幼少時代に使用したとみられるノート代わりの石板とろう石、フリースクールの建物の下見板、野村氏が現地調査に行った際の報告などを紹介しています。

▲ガラスの展示ケースを新たに設置しました。

▲新規展示は当館の 2 階にあります。ぜひご覧ください。

［執筆・編集　小山勝美（学芸研究員）］